

琉球大学学術リポジトリ

中学校社会科において思考力を評価するテスト問題の分析：地理分野を対象として

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2017-05-12 キーワード (Ja): 中学校社会科, 地理的分野, 思考力を評価, テスト問題の分析 キーワード (En): 作成者: 比嘉, 利博, 道田, 泰司, Higa, Toshihiro, Michita, Yasushi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/36606

中学校社会科において思考力を評価するテスト問題の分析

—地理分野を対象として—

比嘉利博・道田泰司

Examination of Test Items which Evaluate Students' Thinking Skills in Junior High School Social Studies: In Case of Geography

Toshihiro HIGA, Yasushi MICHITA

琉球大学大学院教育学研究科
高度教職実践専攻(教職大学院)紀要
第 1 卷

Department of Teacher Education
Graduate School of Education
University of the Ryukyus
No. 1

2017年 3 月

中学校社会科において思考力を評価するテスト問題の分析

—地理分野を対象として—

比嘉利博¹⁾・道田泰司²⁾

Examination of Test Items which Evaluate Students' Thinking Skills in Junior High School Social Studies: In Case of Geography

Toshihiro HIGA¹⁾, Yasushi MICHITA²⁾

要 約

本研究は、中学校社会科において、思考力を評価するテスト問題として、どのようなものがあるかについて整理することを目的とした。平成27年度に実施された各都道府県の高校入試問題のうち、思考を評価する目的で出題された地理的分野の問題52問を検討した結果、答え方としては記述式と多肢選択式があった。求められている思考の種類としては、知識の活用、知識と資料の関連づけ、知識を活用した資料の読み取り、資料の読み取りと関連づけがあった。検討の結果、同じ種類の思考を問うのにも、記述式と多肢選択式の両方の問題が見られ、多肢選択式であっても深い思考から答えを導き出す問題が可能であることなどが示された。

キーワード：中学校社会科 地理的分野 思考力を評価 テスト問題の分析

1. 問題と目的

本研究の目的は、中学校社会科において、思考力を評価するテスト問題として、どのようなものがあるかについて整理することである。

OECDのPISA調査などの結果から、思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題に課題があるという指摘を受け、平成20年に学習指導要領の改訂がなされ、中学校社会科においては、社会的な見方や考え方を養うことを一層重視して改善が図られた。しかし一方で、社会科の授業では知識の暗記に終始してきたという指摘もある(三上・中妻, 2011)。

なぜそうなるのか。その一つの理由として、テストの存在が挙げられるかもしれない。村山(2003)は、空欄補充型のテストを課された生徒は後の学習で浅い処理の学習方略を使用し、記述式テストを課された生徒は後の学習で深い処理の学習方略を使うようになることを明らかにしている。

すなわち、テストで出される問題が空欄補充や一問一答の形であれば、生徒の学習や社会科に対する意識が変わることがなく、結果的に社会科の授業も、なかなか変わりにくいのではないだろうか。

では中学校社会科で、思考力を問う問題にはどのようなものがあるであろうか。この点について日本教材文化研究財団(2008)は、中学校社会科における「思考・判断・表現」の評価モデルを検討している。この研究で、中学校社会科における思考・判断・表現力の評価に関して論じられていることは、次の通りである。

この研究の第一部では、理論的考察が行われている。思考・判断の結果として表現される知識を、事実に基づく知識、理論(概念)的知識、価値(規範・評価)的知識の3つに分け、思考・判断・表現を問う問題開発の原則を以下のように示している。事実に基づく知識は、記憶の成果ではなく、資料読解(史料解釈)の成果

¹⁾ 琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻, 琉球大学教育学部附属中学校

²⁾ 琉球大学大学院教育学研究科教職実践講座, 琉球大学教育学部附属中学校

として問い、理論的知識や価値的知識をとう前提として位置づけている。

理論的知識は、理論内容(定義・説明)を示してターム(用語＝概念)を答えさせるのではなく、タームを示して理論の内容(定義・説明)を問い、理論の妥当性の根拠となる資料(データ)を確立させ、理論の理解力を問う場合は、授業と異なる事例を出題するとしている。

価値的知識は、当該問題・政策に関する事実に知識・理論をふまえたもので問い、大切なのは、内容よりも価値判断の根拠であるとしており、社会科の目標が主体的に判断できる市民の育成であることから自らの考えを持つ意志決定が大切であるとしている。

第3部では、社会科における「思考・判断・表現」の評価問題の開発と論理と題し、高校入試問題に見る「思考・判断・表現」の評価の論理について考察されている。この中では、高校入試問題の分析を通して「思考・判断・表現」を問う評価問題の類型化を行っている。

一つは事実に思考評価問題、もう一つは理論的思考を問う理論的思考評価問題である。この問題は、一問一答ではなく、提示されたり、読み取ったりした事実から理論的知識(理論、概念など)を問うものと、理論的知識を活用して提示された資料などを読み取るものに分けられるとし、この二つは問題によって両方が複合的に組み合わせられることもあるとしている。また、価値的知識を問う評価問題では、事実に知識のみに基づいて問う(事実に知識意思決定評価問題)、理論的知識に基づいて問う(理論的知識意思決定評価問題)、事実に知識・理論的知識に基づいて問う(合理的意思決定評価問題)があるとしている。

日本教材文化研究財団(2008)の研究では、全185ページとけっこうな分量の論考がなされている。しかし、筆者たちが知りたいと考えている、中学校社会科で思考力を問う問題にはどのようなものがあるのかについては、十分に明らかにされているとは言い難い。

そこで本研究では、たとえば先に引用した村山(2003)は、空欄補充型のテスト＝浅い処理の学習方略、記述式テスト＝深い処理の学習方略、と対比して述べている。では、社会科のテストは、空欄補充型のテストと記述式テストの2種類しかないのか、そして思考を必要とする深い学習は、記述式テストでないと問えないのか。また、上記の思考を問う問題の類型化には、思考の結果得られる知識で分類しているが、既存の知識が思考を問う問題とどのような関係があるのか、それよる類型化はできないのか、など、そのようなことを明らかにする。

2. 方法

今回検討するにあたり、各都道府県が出している高校入試問題を対象とした。高校入試は、限られた時間のなかで生徒のさまざまな力を問おうとしていると考えるからである。

検討には、『全国高校入試問題正解 社会』(旺文社)を用いた。2017年受験用(2016年実施)には、思考力を問う問題には印がつけられている。思考を問う問題は、三分野で152問あり、地理的分野は55問であった。今回は、地理的分野を分析対象とした。これは、地理的分野が思考を問う問題に関係すると考えられる地図や統計、図などの資料が豊富に用いられており、地理的分野を行うことで、他の二分野の指標と考えたためである。検討に際しては、「どのような答え方が求められているか」(答え方)、「解答に導くための資料として何が用いられているか」(資料)、「どのような種類の思考が求められているか」(思考の種類)、「どのようなレベルの思考が求められているか」(思考のレベル)の4点について、中学校社会科教師として22年の経験がある第一筆者が分類を行った。

3. 結果

今回検討対象とした、地理的分野における思考力を問う問題55問の内訳は表1の通りである。

「どのような答え方が求められているか」については、記述式と多肢選択式(以降、選択式)があり、

記述式が31問、選択式が22問、両方を求めているもの（選択記述式）が2問、記述式は文節形式の記述式とただ単に語句を答えるものがあった。

「解答を導くための資料として何が用いられているか」については、文章、グラフ、統計、写真、地図、年表がある。その資料は単独で用いられることもあるが、そのほとんどが地図とグラフ、グラフと統計、文章と統計など複数をを用いて解答に導く問題であった。

「どのような種類の思考が求められているか」については、知識の活用、知識と資料の関連づけ、知識を活用した資料の読み取り、資料の読み取りと関連づけ、とした。思考の種類については、これが唯一の考え方ではなく、他にもいくつかの観点がありうる。ただし、分類の際の参考となりそうな先行研究は見あたらなかったため、今回は、第一筆者が中学校社会科教師としての経験を踏まえ、有用と考えた観点をを用いることとした（従ってこの観点の有用性は、今後、検証していく必要がある）。以下に、各観点の内容について説明する。

「知識の活用」とは、問題を解くにあたり、既存の知識の活用がその中心となる。資料を読み取ったり、関連させたりすることをあまり必要とせず、答えを導き出すためには、その答えとなる既存の知識を有しているか、いないか、が重要となる問題に利用される。既存の知識がそのままか、あるいは文脈を変えることで、答えとなることが多い。

「知識と資料の関連づけ」とは、問題を解くにあたり、既存の知識を地図やグラフなどの資料と関連付けることで答えに導く時に使われる。既存の知識を答えに導くために、グラフや統計などの資料は、既存の知識が答えにつながる根拠や、導き出すための手段になるなど、補助的な役割をしている。

「知識を活用した資料の読み取り」とは、問題を解くためには、資料を読み取るための既存の知識が必要であり、その知識と資料が関係し、答えを導き出すことでは「知識と資料の関連づけ」とにしている。

しかし、その知識が直接答えを導くというよりも、知識は、資料を読み取る手段として利用されることで新たな気づき（知識）が生まれ、それが答えとなる。

「資料の読み取りと関連づけ」とは、任意の数の資料を読み取り、その結果得られた知識を用いて、資料を関連させ、答えを導く問題に利用される。これは「知識を活用した資料の読み取り」と「知識の活用と資料の関連づけ」の両方の思考が必要である。

以上の特徴から問題を分類したが、それぞれ「知識の活用」4問、「知識と資料との関連づけ」11問、「知識を活用した資料の読み取り」13問、「資料の読み取りと関連づけ」27問であった。

「どのようなレベルの思考が求められているか」については、特に高い思考が求められていると思われるものは「高」、あまり思考が求められないと思われるものは「低」と分類した。（表2）

「高」のものは7問あった。これらは、問題を解くにあたり、問題と関係した数種類のグラフや統計、地図等の資料を用いる問題であった。それぞれの資料がどのような内容や意味を持っているのかを読み取り、その資料どうしを関連づけることができ、

表1 思考の種類×答え方のクロス集計

思考の種類	答え方	個数	合計
知識の活用	記述	4	4
知識と資料の関連づけ	選択	8	12
	記述	4	
知識を活用し資料の読み取り	選択	6	12
	記述	4	
	選択・記述	2	
資料の読み取りと関連づけ	選択	8	27
	記述	19	
総計			55

表2 答え方×思考のレベルのクロス集計

思考のレベル	答え方	個数	合計
高	選択	2	7
	記述	3	
	記述・記述	1	
低	記述	4	4

答えがうまれるという観点から「高」と分類し、そのなかでも「資料の読み取りと関連づけ」5問、「知識を活用し資料の読み取り」2問を「高」とした。

「低」に分類したものは「知識の活用」の4問あった。これらは、問題を答えるにあたり、資料等の読み取りや関連づけがほとんど見られず、答えを導き出すための既存の知識の有無が直接解答につながる問題である。また解答に社会科的な思考をあまり伴わないでも、解答が可能な問題という観点から「低」と分類した。たとえば、図1の問題がそれにあたる。

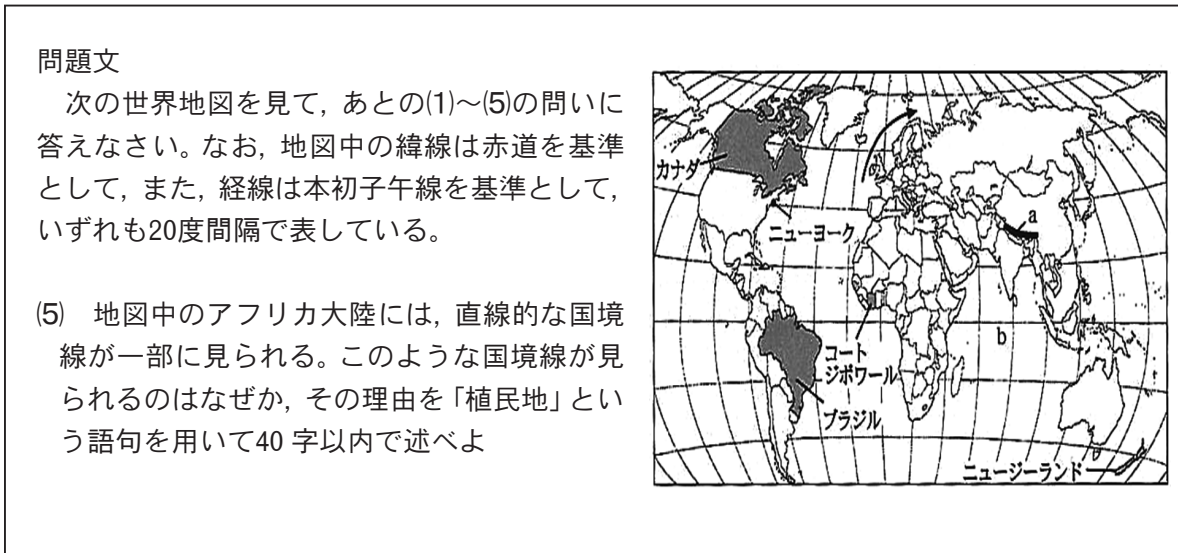


図1 思考「低」と判断した問題例(引用元 新潟県)

この問題は、「地図中」という表現があるものの、それを見なくとも問題文の中にある「アフリカ大陸には、直線的な国境線・・・」と「植民地」の文言が理解でき「アフリカの国境線の一部がかつてのヨーロッパ列強の植民地の名残である」という知識を有していれば、答えを導き出せる問題である。

地図の読み取りもあまり必要なく(思い出すためのヒントには成りえる)答えることができる。しかし、答えが40字以内での記述という点では、自分の既存の知識を整理し、文章化するか、という点では思考を問う問題と考えられるが、社会科的思考というよりもどちらかという、国語に近いのではないかと考える。

表1から、思考を問う問題に対して、答え方×思考の種類を考えるとその表より「知識の活用」以外は選択式、記述式どちらでも存在し、あるいは選択・記述式で問う問題も存在している。(同じ設問に記述、選択肢の2つ答える問題があっても、その答えに関連性がない場合は「選択・記述式」とはせず、それぞれ別の問題とし、選択式、あるいは記述式とした)

表2からは、記述式でも思考のレベルが低い問題もあれば、選択式でも思考のレベルが高い問題もあらることが示された。

特に思考レベルを「低」の問題の思考の種類は、「知識の活用」型であった。

これは問題を解くにあたり、既存の知識の有無が大きくかわるため選択式にした場合、解答が安易に推測でき、そのため問題自体の難易度が下がるため、記述式にして、答えにつながる既存の知識を自分なりに考えてまとめる方法をとっていると考ええる。

では具体的に「思考の種類」について、それぞれの選択問題、記述問題を分析し、どのような過程で答えを導き出しているか、その特徴を具体的に示していく。

はじめに「知識と資料の関連づけ」の「選択問題」(図2)を分析してみると、この問題は、既存の知識として人口ピラミッドの見方、日本の人口構成の変化の推移、少子高齢化の意味を有していることが前

提となる。日本の人口が戦後以降、現代に進むにつれ、少子高齢化が進んできたことと、図12の人口ピラミッドを関連づけると、2010年の人口ピラミッドは選択肢のウと導き出すことができる。

次に「知識と資料の関連づけ」の「記述問題」(図3)を分析してみると、この問題は、東北地方の東側(太平洋)を流れる海流についての既知の知識((あ)は、千島海流(寒流)、(い)は、日本海流(暖流)ということを知っており、それに加え、二つの海流が重なりあった場所は好漁場であるという知識)を持っていることがカギである。しかしながら、問題文だけでは、東側(太平洋)の海流なのか、西側(日本海)なのか分からないため、その既知の知識と地図と関連させることで、東北地方の東側の海流であることを確定し、「千島海流(寒流)と日本海流(暖流)がぶつかりあう豊かな漁場があるから」という答えを導くことができる問題である。

図3の問題は「記述問題」のため、正答になったものは、答えを導きための思考の結果といえる。これに対し、図2の問題は「選択問題」で、正答を4つの選択肢の中から1つを選ぶ形式である。そのため「知識と資料の関連づけ」ができなかったとしても、その問題が正答になる確率は25%となる。そのため、正答をしたからといって、答えを導くための思考の結果とは断言することはできない。

次に「知識の活用と資料の読み取り」の「選択問題」(図4)を分析してみると、この問題は、既知の知識から略地図を見て、それぞれの国の形やその位置からB国は中国、C国はオーストラリアの国名を読み取れる必要である。また、中国とオーストラリアそれぞれの日本との貿易関係の既知の知識(中国は、

問題文

次の文は、長介と父の会話(省略)である。文を読み、あとの各問に答えよ。

(4) 下線部d(少子高齢化)に関連して、図12は1950年・1970年・2010年・2050年(予測値)の日本の人口ピラミッド(年齢別人口構成)である。2010年の人口ピラミッドを図12中のア～エより一つ選び、選択で答えよ

図12

図2「知識と資料の関連づけ」の「選択問題」例(引用元 沖縄県)

問題文

花子さんの家族は、2016年の夏休みに新幹線を使って北海道まで旅行する計画を立てている。そこで、花子さんは、新幹線が通過する道県について調べることにした。ページ下の地図をみて、以下の問いに答えなさい。

(5) 旅行ルートとなっている東北地方には、水揚げ量3万トン以上の漁港が多く見られる。その理由について地図中のあ・いの2つの海流に着目して書きなさい。

(「日本国勢協会2015/16」などより作成)

図3「知識と資料の関連づけ」の「記述問題」例(引用元 富山県)

日本への輸出額がどの国よりも一番多く、その品目に衣類があること(の知識。オーストラリア、鉱山資源が豊富にあり、その品目に石炭や天然ガス等が含まれていること(の知識)を有していることで、統計資料の内容を読み取ることができ、選択肢から解答を選ぶことができる。この問題は日本と両国との貿易関係の知識と両国の国の形や位置の知識を結びつけ事実を確認する問題である。

次に「知識を活用し資料の読み取り」の「記述問題」(図5)を分析してみると、この問題は、地形図の地図記号の意味など、地形図の見方についての知識を持っていることがカギとなる。その知識を用いて大阪国際空港の周辺の地形図を読み取ると、空港の周辺に住宅街が密集していることがわかる。それが問題文と結びつき、答えが周辺の住宅街では飛行機の発着時の騒音が問題であり、早朝と夜間では空港の運用が制限されているとなる。図5の問題は、騒音問題に気づくことができても、地図の読み取りができないと正答を導くことはできない。図4は略地図の国名や資料Ⅱについて、四か国中、一か国の既知の知識がなくても選択肢のため、資料の読み取りが不十分でも、残ったものを選択するなどして正解にたどりつける可能性もある。

次に「資料の読み取りと関連づけ」の「選択問題」(図6)を分析してみると、この問題で重要なことは、グラフの見方についての知識を持ってグラフを読み取るということがカギとなる。グラフⅠは、折れ線グラフと棒グラフで構成されており、この問題を解くためには、グラフⅠ内のそれぞれのグラフを読み

問題文
次の略地図や資料を見て(1)~(5)に答えなさい。ただし、それぞれの略地図の縮尺は異なる。

(4) 資料Ⅱは、略地図中のA~D国における、2014年の日本への輸出額及びおもな輸出品、日本からの輸入額及びおもな輸入品を表したものである。B国とC国にあてはまるものはどれか、資料中のア~エからそれぞれ1つずつえらびなさい。

略地図

資料Ⅱ

国	日本への輸出額 (億円)	日本へのおもな輸出品	日本からの輸入額 (億円)	日本からのおもな輸入品
ア	191,764	機械類, 衣料, 金属製品	133,814	機械類, 科学光学機器, 有機化合物
イ	75,428	機械類, 航空機類, 科学光学機器	136,492	機械類, 自動車, 自動車部品
ウ	50,896	液化天然ガス, 石炭, 鉄鉱石	15,012	自動車, 石油製品, 機械類
エ	12,127	医薬品, 機械類, 航空機類	6,274	機械類, 自動車, 自動車部品

(「日本国勢図会」2015/16年版より作成)

図4 「知識を活用し資料の読み取り」の「選択問題」例(引用元 徳島県)

問題文
図9は、大阪国際空港の周辺を示した5万分の1の地形図である。
(1), (2)の問いに答えなさい。

(2) 9図の大阪国際空港の運用時間は、午前7時から午後9時までとされている。夜間や早朝の発着が制限されている理由を、9図から読み取れることを踏まえて書きなさい。

図9

(国土院平成11年発行「大阪府」による)
(編集部注：実際の図像で切り取られた地形図を75%に縮小して掲載)

図5 「知識を活用し資料の読み取り」の「記述問題」例(引用元 熊本県)

取る必要がある。折れ線グラフは、千里ニュータウンの世帯数を表しており、その数は、1980年以降、あまり変化がないことが読み取れる。棒グラフは、一世帯あたりの人数を表しており、近年は年々減少をしていることが読み取れる。この二つのそれぞれのグラフから読み取れたことを関連付けて考えると、千里ニュータウンの人口推移は年々減少していることがわかる。選択肢のグラフを読み取ると、ウのグラフだけが、人口が年々減少していることがわかる。グラフIで2つのグラフから読み取ったものとア～ウの選択肢のグラフを関連させ答えを導き出す問題である。

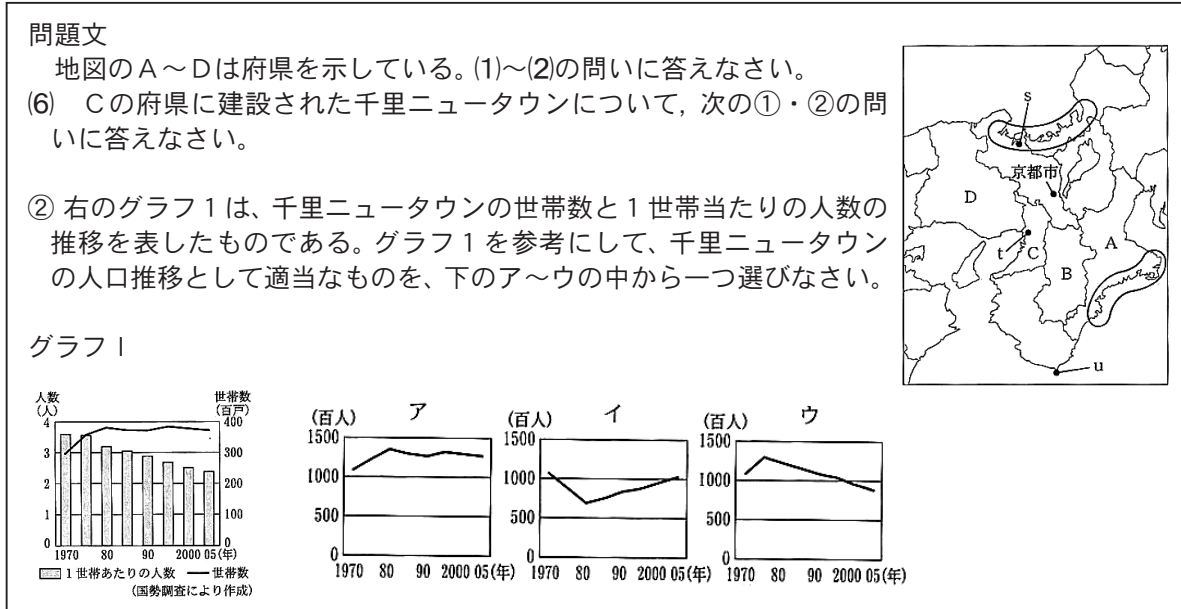


図6 「資料の読み取りと関連づけ」の「選択問題」例(引用元 三重県)

次に「資料の読み取りと関連づけ」の「記述問題」(図7)を分析してみると、資料3からは、東京23区を取り巻くように、各県が位置していることがわかる。資料4からは、東京23区だけは夜間人口に比べ、昼間の人口が多いことが読み取れ、その他の23区外及び、その他の周辺の県はその逆になっていることがわかる。資料5からは、東京23区の事業者数は、神奈川県の上を20万増、大学数は、東京23区外の2倍以上ということが読み取れる。

この3つの資料を関連づけると、資料4の東京23区の夜間人口に比べ、昼間人口が多いのは、資料5の事業所と大学に多くの人々が通勤、通学しているためだということを理解することができ、答えを導き出すことができる。

図7は、正解を導き出すためには、複数の資料の読み取りや関連付けが正解に向けての的確な思考が行わなければならないのに対して、図6は、そのような思考がなくても正答解する確率30%になる。

図8の問題は、「選択・記述」問題である。答え方が「選択式」で答えた後、「記述式」で答えるものであり、選択で答えたあと記述で補足する形になっておられる。この問題は「インドと中国の人口について」答える問題で、答えを導き出すためには、既知の知識として、インドと中国は人口増加が進んでおり、その中でも中国は人口抑制政策として、「一人っ子政策」を行っていた、という知識が必要である。

その知識を有しているなら、問題中の図4のグラフから、A国・B国ともに人口が増加しているが、B国の人口増加率が1990年から低くなっていることを読みとった時点で、中国が一人っ子政策を実施していたという既知の知識と結びつき、図4のB国が中国と確定され、答えを導き出すことができる。

しかし、この問題は、そのような既知の知識がなくても、二択問題のため選択の問題が正解する確率は50%になり、思考をして答えたかどうかには、難しい問題である。記号を選択で答えた後、その答えた問題を導き出した根拠を記述式で答えさせることで、既知の知識を有しているか、それをもとに答えを導き出しているかを見ることが出来る。

問題文

次の略地図（省略）を見て、あとの各問いに答えなさい。

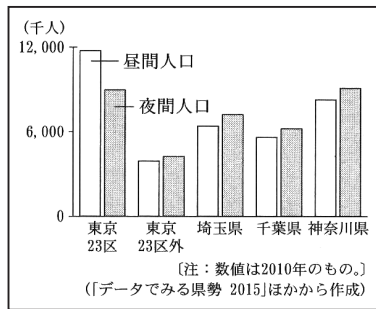
- (6) 資料3は、略地図に示した東京都とその周辺の拡大である。また、次の資料4は、資料3に示した、東京23区、東京23区外、埼玉県、千葉県、神奈川県における、昼間人口と夜間人口を示したもので、次ページの資料5は、東京23区、東京23区外、埼玉県、千葉県、神奈川県における、事業所数と大学数を示したものである。

〈資料3〉



資料4に示したように、東京23区において、昼間人口が夜間人口より多いのはなぜか、その理由を1つとして考えられることを、資料4、資料5から読み取れることをもとにして、「通勤」と「通学」という2つの言葉を用いて書きなさい。

〈資料4〉



〈資料5〉

		事業所数	大学数
東京都	東京23区	498,735	126
	東京23区外	128,622	56
埼玉県		244,825	43
千葉県		190,239	39
神奈川県		290,603	47

〔「データでみる県勢 2014」ほかから作成〕

〔注：大学数には、短期大学数を含む。数値は2012年〕

図7 「知識を活用し資料の読み取り」の「選択問題」例 (引用元 徳島県)

問題文

インドと中国について、(1)、(2)の問いに答えなさい。

- (2) 4図は、1960から2010にかけてのインドと中国の国別の人口について、それぞれの1980年の人口を100とした場合、どう変化したかを比較したものである。

中国に当たるものを4図のA、Bから一つ選び、選択で答えなさい。

また、そう判断した理由を、中国が進めてきた政策に触れながら書きなさい。

図4

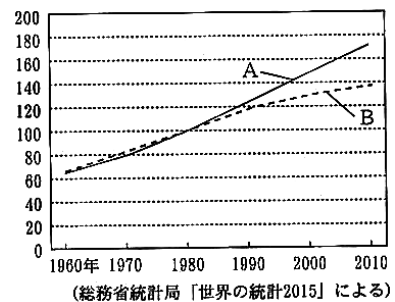


図8 「選択・記述」の問題 例 (引用元 熊本県)

4. 考 察

中学校社会科で思考力を問う問題にはどのようなものがあるのか、という問いを立て、分析を行ってきた。

全国高校入試問題の分析をすることで、その問題から解答を導き出す過程から「思考の種類」を「知識の活用」、「知識と資料の関連づけ」、「知識を活用した資料の読み取り」、「資料の読み取りと関連づけ」と

分類し、その答え方から「選択問題」と「記述問題」に分類することができた。

しかし、その「思考の種類」は、既存の知識をもとにした思考という点では一致するが、それぞれは同じレベルの思考ではなく、思考の深まりという点では差がある。既存の知識と答えを結びつけるだけの思考(図1)や答えを導くために既存の知識を資料と関連づけるための思考(図2・3)、知識を活用し資料を読みとるための思考(図4・5)、複数の資料を読み取り、そこで生まれたそれぞれの知識を多面的、多角的に関連づけるための思考(図6・7)の順となる。

また、その答え方に関しても「知識の活用」の問題(選択問題がなかったため)を除いては、「選択問題」と「記述問題」に分類でき、問い方だけから思考のレベルを考えた場合は、一般的に深い思考が必要だと考えられている「記述問題」の中にも図1のような問題や用語を答えさせるだけの問題など、図などの資料を分析しなくても、既存の知識が答えを導き出すことに大きな役割を持っているものは思考を問う問題としては不十分で、思考の深まりがあまりみられないことがわかった。

「選択問題」でも図4や図6のように資料を読み取ったり、関連づけたりなど、うまく活用して問題を作成することで深い思考から答えを導き出す問題もみられるものもある。

しかし、今回の「選択問題」の答え方のほとんどが複数の選択肢の中から、1つあるいは複数の選択肢を選ぶ問題であった。問題自体が、深い思考が必要な内容になっていたとしても、ただ単に選択肢を選ぶ問題であったら、偶然に正答の選択肢を選ぶ可能性も否定できない。

以上のこのことから、思考を問う問題には、その問題を解く方法として、4つの「思考の種類」に大別することができた。これらは既存の知識をもとに行われるが、またその4つの思考は、同列ではなく、4段階の思考のレベルとして表すことができる。しかしながら、「選択問題」と「記述問題」による答え方の違いによっては、必ずしも記述問題のみが思考を問う問題とは限らず、思考の問題の答え方による「思考のレベル」の差異を見ることはできなかった。

「記述問題」で思考を問う問題にするためには、その問題がただ単に既存の知識のみで答える問題にするのではなく、考えて資料を読み取ったり、関連付けたりして、どの「思考の種類」を使わせるのか、を考える必要がある。また、「選択問題」では、どの「思考の種類」を使わせるのか、と同時に選択肢の数を増やしたり、選択肢をただ選ぶのではなく、選択肢の順番づけをしたり、図8のように選択した答えの根拠になる知識を記述させたり、あるいは選択した理由を記述させたりするなど、答え方に工夫をすることも考えられる。今回は、地理的分野のみの考察であった。そのため、社会科全体の特徴を示すには、不十分であった。そのためにも、残りの二分野の思考を問う問題を考察することが必要であり、そのことで中学校社会科の思考を問う問題の全体像を示すことができると考え、今後の課題とする。

附記 本研究は、科学研究費基盤研究C「21世紀型能力としての批判的思考力を育成する中学校の授業デザイン」(代表者：道田泰司 課題番号16K04306)の助成を受けたものである。

[引用文献]

- 株式会社 旺文社 (2016), 『2017年受験用 全国高校入試問題正解 社会』 旺文社
 三上真葵・中妻雅彦 (2011), 「「共感」に基づいた授業実践の提案—安井俊夫「スパルタクスの反乱」の実践に学んで—」 『愛知教育大学教育創造開発機構紀要』, 1, pp. 127-133.
 村山 航 (2003), 「テスト形式が学習方略に与える影響」 『教育心理学研究』, 51, pp. 1-12.
 日本教材文化研究財団編 (2008), 「社会科における「思考・判断・表現」の評価に関する研究」, 『日本教材文化研究財団』 <http://www.jfecr.or.jp/cms/zaidan/publication/pub-data/chosa/chosa61.pdf> (2016年7月15日取得)

